



●本の紹介「賢治と鉱物」

文系のための鉱物学入門：【著者】加藤碩一・青木正博【出版社】工作舎

本書は宮沢賢治の作品に多く登場する鉱物を色ごとにまとめ、科学的解説をしている。

著者のひとり加藤氏が賢治作品と鉱物、もう一人の青木氏が鉱物の美しい写真と鉱物解説を担う二段階構成をなしている。

第1章 - 賢治の心象にある青から始まり、第2章 - 眼を愕かしたふしぎな緑、第3章 - 黄のひかりうすあかり、第4章 - 赤のあらゆる phase、第5章 - 白・黒とともに織りなす墨絵の世界、第6章「修羅」を象徴する色、黒で終わる。

賢治作品と鉱物の豊かな色彩は神秘的で儚く奥ゆかしさの世界へいざなう。そう、夏の終わりに感じる物悲しさに似ている。



(幹事：渡邊裕美)

●絵画視点と自然に学ぶ色彩 1

北軽井沢燐恋は、標高が高いので、夏の暑さを忘れることができ、風景も格別です。この写真は、夕暮れ時のキャベツ畑。夕陽が色相を変化させていくさまに魅了されながらも、手早く筆を動かします。あまりの変化の速さに、焦ることも、たびたび。本来、キャベツ畑は、広い面積で観ると、青緑に感じます。ペールトーンでp14位ですが、夕方の光でp12（黄緑）に変わり、明暗対比も強くなります。地平線の位置で、構図が決まりますが、水色の空、だいたい、赤みの黄、黄色がアクセントになると同時に、全体調和を作っています。影には、緑の補色・赤を混色に使います。それが、色相のバランスを整え、自然な画面になるようです。絵画制作では、黒を混色に使うことは少なく、黒は単独で使うと効果的です。でも難しい。自然に包まれ自然に学ぶ滞在でした。 (画家：狩野裕子)



●日本の伝統的な色名・常盤色

常磐は「とこいわ」を語源とし常に変わらない岩の意味をもつ。常磐色が象徴するのは、長寿、不老不死、生命力、祝福などであろうか。

常磐とは、松や杉などの常緑樹の葉の色が年中変わらない緑色を保つと共に、松は長い寿命を持ち、竹は成長が早く、梅は春一番に咲き、共に寒さに強いことから、松竹梅は新年を祝う門松に使われてきた。

古来より、松は障壁画の題材とし数多く使われてきた。常磐色の緑を表現する岩絵具の緑青（ろくしょう）は孔雀石と呼ばれる銅鉱石を砕いて作り、その小粒子の顔料は白緑（びゃくろ）と呼ばれる。

緑青の洋名はマラカイトグリーンである。

金属銅が水分と炭酸ガスで酸化することにより生じる塩基性炭酸銅も緑青である。

常磐色の別名として、千歳緑、松の葉色、松葉色がある。松は千年の樹齢を持つと信じられ千歳緑の色名になったのであろう。

緑系の伝統色の一つに「麴塵」（きくじん）という珍しい名前のある色がある。「こうじかび」色である。この色は平安時代から天皇の普段着の色として禁色に指定されていた。「こうじかび」が貴重品として尊ばれていた時代のネーミングである。 (永田泰弘)